

端午に寄せて

— 五月飾りのはなし —

林 直輝

端午の節句とは

現在、「五月五日は何の日でしょうか？」と質問すれば、ほとんどの人は迷いなく「こどもの日！」と答えられることでしょう。同じように「三月三日は？」ときけば、「ひなまつり」と答えるはずですが……。ヒドイものになると、雑誌などに「五月五日はこどもの日。端午の節句でもあるこの日……」といった表現まで目にするものがあります。ゴールデンウィークで嬉しいのは解かりま

すが、国民の祝日「こどもの日」が制定されたのは、昭和二十三年。ただか五十余年のことにすぎません。その祝日に五月五日が選ばれたのは古来、男児の誕生を祝い、健やかな成長を祈る端午の節句の日であるからに他ならないのです。

その「端午の節句」がわが国において行われるようになったのは奈良時代からといわれ、中国より伝わったものと考えられます。「節句」は元来、「節供」と書き表し、季節の変わり目などの節目に神に供える食物を意味

していましたが、のちに節日そのものをも指すようになりました。

春夏秋冬いろいろな節日のなかで「端午」とは、月の端はための午うまの日を意味し、当初は五月に限ったものではありませんでした。これが五月五日に定着したのは、午と五の音が通ずることによる混同と、中国において月と同じ数の重なる日を「重日」として忌み嫌う思想があり、なかでも季節柄、疾病の流行を促しやすことから「悪月」とされる五月は、一層の災厄除去の必要があると考えられたためです。端午の節句を「菖蒲の節句」ともい、その行事に菖蒲が欠かせないのは、剣のような葉の形と強い香気に破邪・長命の力があるとされたためで、これも中国から伝わりました。

日本では五月はまた、田植えを前にした重要な時期にあたります。身の穢れを祓い、豊作を祈願するという古来の農耕儀礼は、中国の風習を受容する素地となつて、ここに日本の「端午の節句」が生まれたものと思いま

す。しかし、この端午が今日のような男児の節句となるのは、まだずっと後のことなのです。

古代の習俗さまざま

日本における端午の節句に関する記録として、古くは『日本書紀』推古天皇十九年(六一一)五月五日の薬やくり獵りょう(薬草採取)、『続日本紀』聖武天皇・天平十九年(七四七)五月五日の騎射走馬(馬を走らせて弓を射る競技)、菖蒲かつら(廷臣が冠に菖蒲をつける)などがみられます。

これらの行事・風習はつづく平安時代にも御所で行われ、また次第に民間の模倣するところとなつていきました。菖蒲を屋根に葺く「軒菖蒲」は現在でも一部に残っていますが、『枕草子』にも御所はもとより庶民の家々にいたるまで広く行われていたことが記されています。

御所ではまた、「薬玉」を飾る風習がありました。薬玉は字の如く、蓬や菖蒲など災厄を祓うとされる薬草を

球形にし、これも災厄を祓い長命を保つとされる五色の糸で結び垂らしたものです。のちには季節の美しい花が加えられ、さらに造花で作られるに至りました。このように、魔除けの意味だけでなく、室内に掛けて観ることを念頭に置いた薬玉は、最初の五月飾りといえるでしょう。

鎌倉時代になると、端午の節句は武家を中心として盛んになります。そのあらわれのひとつが飾甲冑かざりかちゅうの登場です。端午の節句に甲冑（鎧兜）を飾った最古の記録は『増鏡』にみえる建長三年（一二五一）五月五日「所々より御かぶとの花、くす玉など、いろいろにおほくまいれり」かと思われます。飾甲冑の存在は、「菖蒲あやむす尚武」の意味合いが強くなってきたことを示すものと考えられ、武家その象徴ともいえる甲冑を飾ることは、公家を中心としたそれ以前の端午の節句ではあり得なかつたのでしよう。

つづく室町時代にも、菖蒲の根を刻んで酒に混ぜる

「菖蒲酒」、菖蒲の葉や根を刻んで風呂に入れる「菖蒲湯」、平安以来の「印地打いんじうち」と呼ばれる男児の石合戦など、破邪と尚武の祈りを込めた習俗が盛んに行われました。菖蒲酒や菖蒲湯は今でも馴染みのある方は多いことと思いますが、これらは実に古くからの伝統ある風習なのです。

江戸時代の端午

こうした武家社会の延長として、徳川幕府のもとに江戸時代を迎えると、いよいよ今日の端午の節句がかたちづくられます。室町の習俗を引き継ぎながらも、江戸の端午の節句がそれと大きく異なるのは、そこに男児出生祝いの意味が加えられたことです。徳川將軍家の事蹟の記録である『大猷院殿御実記』寛永十九年（一六四二）五月五日の条には、「けふ家門諸大名より献ずる菖蒲兜あやむすを庖所はうじょへかざり。旗十五本。白旗五本。白地御紋の旗五本。家門より献ぜられし旗五本。高矢倉の前たて

られる。」とあって、のちの徳川四代將軍・家綱の盛大な初節句の有様がうかがえます。

しかも、このように兜や幟旗を飾ることは將軍家や大名家のみならず、すでに庶民の間にまで広まっていたようです。それは、わずか六年後の慶安元年（一六四八）に、五月節句の兜に立派な蒔絵や金具を施したり、高級な糸類を使ったりしてはならない、幟旗に絹を用いてはならない、といった町触が出され、その奢侈を戒めていることから知られます。

徳川幕府が公儀の祝日として五節句（人日・一月七日、上巳・三月三日、端午・五月五日、七夕・七月七日、重陽・九月九日）を定め、なかでも端午を重視したのは、菖蒲が尚武に通ずることと、武家にとつては跡継ぎとなる男児の出生と無事な成長とが最大の慶事だったからでしょう。しかしながら、その思いは庶民とて同じこと、立身出世を願うところはむしろ庶民の間にこそ強くあつたはずです。

江戸中期頃までの五月飾りは、総じて屋外に飾る「外飾り」が主流でした。それは、五月飾りが武家の戦陣に做つた幟や槍、長刀、吹流などであつたからばかりでなく、外に飾ることによって神の降臨の目印（依代・招代）とする意味もあつたと考えられます。すなわち端午の本義的な意味が具現化されたかたち、それが外飾りなのです。

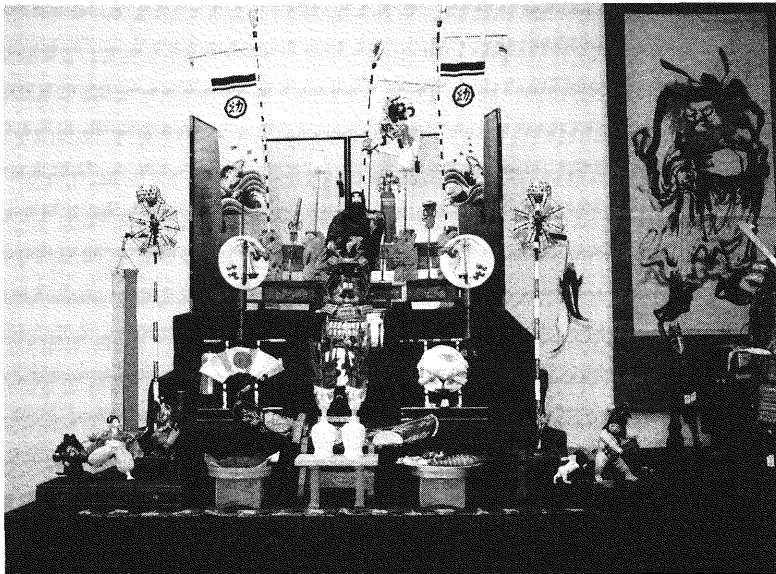
ただし、外飾りの多くは江戸中期以降、次第にミニチュア化して屋内に飾られるようになります。往来に面して飾っていた大きな兜や武者人形が内庭や縁側に引込み、ついには座敷に並べられる「内飾り」に変化した理由には、奢侈を戒め、大火を懼れた幕府の禁令のみならず、文化の爛熟とともにより工芸的で精巧なものが好まれるようになったという自然の成り行き、そして、江戸中期から後期にかけて急速に発達した上巳の節句の雛人形・雛道具の影響もあつたことでしょう。高度な工芸技術と豊かな庶民文化を背景として完成された江戸後期

の五月飾り。これこそ、現代の五月飾りの原形となったものなのです。

内飾りが広まる一方で、外飾りも全く廃れてしまったわけではありません。勇壮な武者絵を描いた幟や鯉幟に代表されるように、屋外の幟旗類はむしろこの頃から一段と盛んに立てられました。なかでも鯉幟は江戸っ子のアイデアと伝えられ、中国黄河の急流を登りきった鯉が龍になるという「登龍門」の故事にちなんで創られたと考えられます。鯉幟は今日もおお五月の風物詩として欠かせない存在であり、男児の出世を願う象徴としてまことにおさわししい、ユニークで見事な造形といえましよう。

近代そして現代へ

さて、明治の端午の節句と五月飾りも江戸時代のそれと大差はありませんが、維新後は新政府によって旧幕時代の五節句が廃止され、また西洋の文物が急速に流入し



▲お茶の水女子大学附属幼稚園の五月飾り

たこともあって、一時衰えました。しかし極端な西洋一辺倒から次第に落ち着きを取り戻す明治三十年頃には復活。雛祭とともに旧幕時代を凌ぐほどの興隆をみせました。

ところが、大正・昭和戦前とますます盛んな感があつた端午の節句に、またしても危機が迫ります。それは昭和二十年の敗戦後のこと、五月飾りの甲冑や刀をはじめとする武器類を軍国主義の産物と決め付ける見方が浮上してきたのです。そうした意見は今日もまま聞かれますが、そのほとんどは端午の由来を無視した、極めて短絡的なものといわざるを得ません。端午の節句が災厄を祓う行事であること、そのために身を守る象徴として武器を飾ってきた伝統を知れば、それらが忌まわしい戦争を賛美するものでないことは明らかでしょう。しかも五月飾りは、みな日本の工芸の粹を集めるものばかりなのですから。

表面的な私たちのみに囚われるのではなく、そこに込

められた本義をしっかりとみつめることが大切であると思えます。

おわりに

風薫る五月。澄んだ青空と鮮やかな新緑のなかに鯉幟が泳ぐさまは、日本を代表する美景といっても過言ではないでしょう。永い間、日本人が共感してきたこの美意識も、戦後の無節操な開発や生活様式の変化などの影響を受け、いまや懐かしき過去の存在となりつつあります。

あらゆる面において心の荒廃が叫ばれる現代、幼い子どもたちの幸せを祈る節句行事はなお一層意義深いものがあるのではないのでしょうか。その「まごころ」が子どもたち一人ひとりに正しく伝わることを願ってやみません。

(吉徳資料室 学芸員)